

輝く一着へ 2代続け「名工」

洋裁 東司フサエさん(84)・石井幸子さん(61)

2代続けて「現代の名工」になった親子が福岡市早良区に在る。洋裁の東司フサエさん(84)と石井幸子さん(61)。ふたりで高級注文服を作り続けて40年余。「その人が輝く一着を作りたい」。磨いた独自の技で服を仕立てる。

究人

KIWAMEBITO

国道から少し入った住宅街に、「クチュールとうじ」の小さな看板がある。左の家の表札は「東司」、右は「石井」。ここが2人の自宅兼職場だ。



仲良く洋裁に取り組む東司フサエさん(左)と石井幸子さん親子。左の足踏みミシンは50年以上使い続けている。いずれも福岡市早良区小田部3丁目、河合真人撮影

立体感生む細かい採寸

注文を受けると、まずその人の全身を測る。この採寸からして独特だ。例えばウエストなら「メジャーをぐるっと回して何センチ」だけでなく、おしりや



体形を測った数値を細かく書き込んだ特注のカルテ。これをもとに、一人ひとりに合うデザインを考えるという

東司フサエさんは1933年福岡市生まれ。82年と84年に全日本洋装技術コンクールで参議院議長賞。95年に黄綬褒章受章。現在も一般社団法人日本洋装協会副会長、同県支部長を務める。石井幸子さんは55年福岡市生まれ。小さなころから母フサエさんを手伝い、OJを経て洋裁の道へ。95年に特級洋裁技能士認定。今年から福岡市技能職団体連合会の事業部副部長として、他職種との交流や後進の育成にも力を入れる。

胸に物差しを当てて、そこを「ここにあるから、洋服から何センチ引込んでいられるか」が立体的にできるんです。細かく測る。「横幅がある」とフサエさん。それから一人ひとりに合った型紙を作る。使う生地は主に絹や絹、羊毛など天然素材。生地を裁つのも縫うのも、大事なものは「生地50項目以上の数字を書き込



採寸する東司フサエさん



生地にひだを寄せて立体的に見せる技法を凝らしたドレス

の目をきちんと合わせることに。1センチのズレで着心地が変わるからだ。体形が変わっても直せるよう、縫いしろを多めにとる配慮も忘れない。手で仮縫いして、お客に着てもらってから、微調整してやっとミシンで本縫い。ボタン穴などは一針一針、手がかかる。ワンピース1着を作るのに、2人がかりで1週間かかる。「できた服をお客様に渡すときは、娘がお嫁にいくような感じ」と幸子さんは言う。

その後、バブルがはじけたが、注文は途切れなかった。仕立て代はワンピースが5万7千円から、スカートが3万円から。これに生地代がかかる。安くはないが、作った服を着ている人を見て「私にも作って」と県外から訪れる人がいる。「お客様がお客様を連れてきてくださる」とフサエさん。

フサエさんは1959年、娘2人を育てながら中央区に「とうじ洋裁店」を開き、73年に現在地へ移った。そのころ、次女の幸子さんは高校生。卒業後は建設会社に就職したが、3年後、「私も、ものづくりがしたい」と加わった。

その仕事を支えつつ、技を受け継いできた幸子さん。昨秋、「現代の名工」を受賞した。後輩や小学校での指導など、親子で後進の育成に力を入れている点も評価された。厚生労働省によると、親子での受賞は全職種を通じて全国で8組。洋裁では唯一だという。

フサエさんは「どうすれば早く、美しく縫えるか。ずっと自分で探してきました」。独自の採寸法のほか、「神の手」ともいわれる器用な手先を駆使して、布にひだを寄せて立体的に見せる技法も開発した。89年に全日本洋装技術コンクールで総理大臣賞を受賞。93年には「卓越した技能者(現代の名工)」として国から表彰された。

平日の日中は2人で作業場にこもる。これまで2人で作った服は2千着超。「一着一着が違う。一着一着が挑戦なんです」。2人そろって胸を張った。

「お客様がお客様を連れてきてくださる」とフサエさん。

「お客様がお客様を連れてきてくださる」とフサエさん。